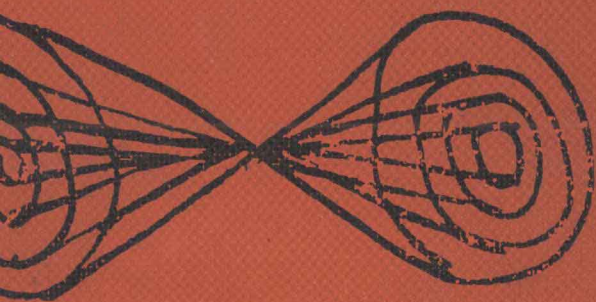


近代小説集

★

世界文學大系



近代小説集★

宮廷画家の花形 セバスティアン・ヴァン・
ストーク ドリアン・グレイの画像 説教壇
から射つ 北の海 踏切番ティール 騎兵の
物語 グストル少尉 アドルフ アルジール
の妖精トリルビー マテオ・ファルコネ シ
ルヴィー アルルの女 ヴェラ 赤い卵 リ
ップ・ヴァン・ウィンクル 街の女マギー

工藤好美・平井正穂・小栗浩・国松孝二
佐藤晃一・松本道介・野島正城・市原豊
太・鈴木健郎・江口清・入沢康夫・桜田
佐・菅野昭正・大井征・斎藤光・大橋健
三郎 訳

世界文学大系

91

筑摩書房版

世界文学大系 91

近代小説集 ★

昭和39年9月10日発行

編 者 平井正穂・佐藤晃一
小林正・西川正身

発行者 古 田 晃

発行所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京4123 電話(291)局7651

目次

宮廷画家の花形	工藤 好美	5
セバステイアン・ヴァン・ス トーク	工藤 好美	20
ドリアン・グレイの画像	平井 正穂	33
説教壇から射つ	小栗 イヤ	163
北の海	国松 孝二	191
踏切番テイル	ハウプトマン	227
騎兵の物語	佐藤 晃一	246
グストル少尉	松本 道介	252
アドルフ	野島 正城	271
アルジールの妖精トリルビー	市原 豊太	313
マテオ・ファルコネ	鈴木 健郎	338

シルヴィ

アルルの女

ヴェラ

赤い卵

リップ・ヴァン・ウインクル

街の女マギー

解説

ネルヴァ
入沢康夫訳
346

ドレーデ
桜田佐訳
371

リラダ
菅野昭正訳
374

フラン
大井征訳
380

アーヴィン
斎藤光訳
387

クレイ
大橋健三郎訳
398

平井正穂・佐藤晃一
小林正・西川正身
438

装幀 庫田 發

近代小説集
★

宮廷画家の花形

古いフランスの日記からの抜萃

ペイター
工藤好美訳

ヴァランシエンヌにて、一七〇一年九月

ひとびとは私の父の大きな仕事部屋の手入れをしていた。あの気持のよい倒れかかった場所では、こけのはえたかわらをうしない、また私たちが夏、涼をとるために彫刻家の小さい庭に腰かけると、すぐむこうに見える、高い白壁のうえの、子供のときからなじみのふかい緑色のしみをうしなつた。ワットー老人の職人にまじつて、「天才」という評判のたかい、私の父の洗礼の子で、名前も父のそれにちなんでつけられた、髪の毛の黒い、彼の息子がきた。この若者の大きなおちつかない眼は、ここにさらされてあるさまざまな線画の方へ、たえずさまよっているようにみえた。私の父は彼が実際天才で、うまれながらの画家であると主張する。九月の市は広場でひらかれた。私たちの窓のしたのひろい空地には、もの音と色の不思議な混乱がおこつた。そしてちょうどひとびとの群れがもつ

ともたてこんでいるあたりに、若いアントニー（フランドール出身のフランスの画家アントワーヌ）は、古い公会堂のからの壁龕にのぼつて、あたりのさまを忠実に、しかし一種の優美さ——父が私たちに指摘したところによれば、ひとの窓から見られる粗野な現実をとりあつかう場合のおどろくべき省略の技能——をもって写生しているのが見いだされた。その優美さはありふれた古いハレレクティンやクラウンやコランバイン（れいぞう喜劇に出る人物）などがある神仙の国のひとびとであるようにみえさせ、あるいは一時の気まぐれからただかりそめに道化師の雑色の衣をつけて、まじめな諷刺の世界をおどけた顔にふくませ、別の方面からみれば悲劇にはかならない一種の喜劇を演ずることのできる、かぎりなく愉快な悲劇役者のように見えさせた。彼は彼のスケッチを今日私たちの家にもつてきた。父が彼にいろいろなことをたずね、彼の作品を推称したとき私はそこにいあわせた。しかしその若者はひどくよるこんだふうもみせず、さしだされた古いマラガ酒の盃もほさないで帰つた。彼の父は彼を画家として教育することについては、なんと言つてもききいれようとしない。しかし彼は貧しいのではない。そしてこのごろ自分で新しい石造の家をたてた。大きな灰色のつめたい家である。主教会の黒い梁をもつた、古い漆喰の家のほうが今度の家よりうつくしかった。それはスペイン人の時代からあつたもので、ヴァランシエンヌ（北フランスの町）におけるもつとも古い建物のひとつであつた。

一七〇一年十月
主として私の父のとりなしによつて、ワットー老人はアントニーをこの町の絵の師匠につけることを承諾した。私はミサからのかえりに、彼が早くも課業にいそいでいるのにならう。彼は今もなお石工たちとともに働いているので、夜おそくと朝はやくの時間や、手のあいたすべの瞬間を、このようにして利用するのである。そしてまた彼はこの古風な町にきわめておおい祭日をもっている。ああ、彼のような才能はきつといつかは大きな勤労をも、ほねおりがいのあるものに見えさせるであらう。彼はおどろくべき進歩をする。しかも、すこしも得意になるようすはなく、その進歩が彼にとつて結局きわめてたやすく得られたものだけに、たいしてうれしそうでもない。彼は私の父の意見によれば、完全な成功をおさめているにもかかわらず、それを認めてみずからよしとする気持がすくなすぎる。否、それどころか、彼は、ともすれば、彼自身ならびに彼が製作するものにたいして、あまりに早く不満をいだきやすい。しかしこういうことがらにもまた「ほどよい中庸」というものがある。実際、私は、彼のいつものなかばものがなしの優雅な態度におりおりあらわれる一種のアイロニーによつて、はずかしめられたように感じることもある。ただ、しかし、私の見るところでは、彼は自分自身をおなじような仕方ととりあつた。

一七〇一年十月

アントニー・ワットーは今しばしば私の家にくる。彼ができるだけたびたび、あの興味をひくもののできわめてすくないうつろな石の家と、むくつた老人夫婦からのがれるのは、彼のうちにあるうまれながらの優雅な本能による。彼の家庭の粗野なことは、生活の比較的単純な美でもたいせつにもとめる彼の感情を、ともすれば貪欲になりやすい、餓えや渇きのような、肉体的な欲求にした。そして思うに、彼はたぶんこれらのものをあまり重んじすぎる。しかもなお彼の性質を考えると、あの粗野な場所における彼の苦しい運命は、ひとの心をうたないではおかぬ。そしてまた彼は私の父の経験によつて利益をえる。父は専門の彫刻以外の芸術についてもおおくの知識をもっている。そしてアントニーは父からよろこんで迎えられる。ことにこの数週間、雨がふりつづいて、そに出て写生をすることもできず、風がまだなかばしか舗道をかわかさないうちに、また別の夕立が来ひとびとは家にとどまり、そこからきこえるもの音としては、蝶番のうえのおちつかぬ雨戸のひびきか、イギリス人とオーストリア人とにたいする戦いから、勝ちあるいは負けてかえつて来あるいは出てゆく、はてしない疲れた兵士の広場をよこぎる行進の音にすぎないとき、彼はまったく私たちの家族のひとつりのようになってしまった。「彼は遠くへゆくであろう」と父はいう。彼はもしもできるならば、文字どおり遠くへゆきたいのであらう——パリへ、ローマへ。

たしかに私たちのヴァランシエンスはしづかな否、ねむたげな場所であると言わざるをえない。それはフランスのものとなり、あまり国境に近くないようになってから、これまでよりもう一つそうねむたげな町になった。草は古い砦のうえにおいしげり、そこを歩くのは——歩いてものを思うのは——心地がよい、私のような生氣のない、高きのをぞむ心にかけているものには。

一七〇二年十二月

アントニー・ワットーは今朝パリにむけて出発した。それは私たちにとつてまったく突然であつた。ひとびとはパリで楽しい生活をおくる。フランダースでよく知られているこの土地の一人の背景画家は、これまでパリの一つの劇場で働いていた。そして彼はすこしばかり知つていた若いワットーをつれて出発した。この若者はやくにたつからいっしょにつれてゆくように、と背景画家を説きふせたのが、私であるということは、ワットーは知らない。私たちは彼にささやかな贈物——彼の縁飾りにするために私たちが手ずからつくつたうつくしい亜麻糸製のレースなどをおくつた。ひととはパリではおめかしをしなければならぬ。それに彼はきやしゃで、しなよい姿をしている。私自身はずつとまゑに他のひとのために縫いとりをした絹の財布を彼におくつた。(ここにこの日記の筆者がわれる。しかし彼女がそこにワットーを恋しているらしいことは、よほど注意がたい読者でないといふことがないであらう)ほんとに私たちはこれから彼の運命(私一個人としてはそれがしあわせなものであることを

確信する)を遠くからながめるであらう。ワットー老人は彼の出発については知らなかった。そしてたいへん怒つてさつきまでここにきていた。

一七〇三年十二月

アントニーがパリに行つてから今日でもう一年になる。若いアントニー・ワットーほどの気のきいた若者であらうとも、世に知られぬものにとつて、あのひろい、ひとびとの群れのひしめきあう大都会における最初の努力はたいへんなものに相違ない。しかし彼がかえつてこないのをみれば、彼は自分のえらんだ目的に近づきつつあるのであらう。もつとも、彼が自分のことについて、かわいそうな老人たちにあまり知らせてやらない、ということは事実である。彼はメティエ氏のために働いているのであるが、この画家の弟子たちは、それぞれ日ねも宗教や空想の安絵のただ一部、たとえば頭飾りとか外衣とか手とかいうものをかき、メティエ氏はその絵をノートルダム橋の歩道でやすい値で売りますのである。アントニーはすでに弟子たちのうちでもつとも熟練なものとなり、このごろ教会の絵をかくようにとりたてられたようである。私はこのことを考えるのが好きである。彼は彼の労力にたいして一週三リーヴルと毎日のスーブを受けとる。

一七〇五年五月

アントニー・ワットーは絵の安売商人から別

れて、今では家具類（現在はやつてゐる屏のうえの飾りなど）の画家で同時にまたリュクサンブールの宮殿の門衛をも勤めているひとのところで働いている。アントニーは実際その大きな宮殿のどこかに住んでいるのである。そこには彼がよろこんで模写するであろうと思われる王の蒐集したイタリーの絵画がある。その庭園もまた壮麗で、彼の知らせによれば、その布置と装飾との点でまったく新しいある種のものをそなえている。ああどんなに私は、すくなくとも空想のなかで、他の王家の庭よりも自由でそれほど型にはまっていないうれしい美しい庭園のなかにいたいと思うことであらう。私は彼がそこでながい夏の一日の仕事をおえて、大きな、広い葉をもった樹の涼しい蔭を楽しんでいるのを見るような気がする。それらの樹のひとつひとつは、さながら、宮廷の高官のようである。いずれもむこうの、いま日の沈んでいる、うちひらいた、人里遠い野のものであるかのような風情をもっているけれども。

しかしこれらすべてのものにとりまかれながらも、彼がいま六十リールで売ろうと望んでいる絵の主題——*Un Départ de Troupes*（出発する兵士）——このヴァンシエンスでよく研究することのできる軍隊生活の一つの情景によつて判断してよいならば、彼の心はかならずしもまったく故里から離れてはいない。

若いワットーは故里にかえつてきた。それは

一七〇五年六月

彼のような独立心の強い性格にとつて、ものごとがよくいったるしである。そして父の石工の家には住まないで、私たちの家にとどまることに同意ができた。彼の年とつた両親たちは、彼が私たちのところにくるのは、父のさしがねによるのだと思つてゐる。私たちはフランスの人民になつたけれども、心は知らずすくなくとも表面においては、なお古いフランダース人である。フレンチ・フランダース（近代フランスのフランドル地方に相当する）においてすら、たとえばドウェエやサン・トメールにあつては、私の理解するところによれば、教会やひとびとの家のなかに、通りからでも見られるように、こまかなゆきとどいた心づかいと清楚との風情がみとめられる。アントニー・ワットーはヴァンシエンスにかえつてから、これまでよりもいっそうこれらのことに注意する。そしてすくなくとも美しいものと優雅さとの愛好者である彼は、バリーに住まつた後、フランダースの清らかさを非常に高く評価する。彼が年若な少年のころ、あたかも生活の単なる装飾物が必要欠くべからざる品物であるかのように渴望した世俗の美を、彼はすでに久しくこれらのものに慣れ親しんだ者のようにとりあつかう。そして彼がなおひそかに値ぶみしすぎているとおもわれる生活の比較的単純な美を利用するときの、なかば軽蔑した態度のなかには、高貴とも名づくべきあるものがある。彼には優雅な思想——*le bel sérieux*（美しいまじめさ）——ともいふべきものがあつて、それが私にあの名高い沈黙者ウィリアム（一五三三年に

死んだオランダの政治家で、オランダ共和国の創立者（ペイタ）の祖先がこの人の時代にオランダからイギリスにわたつた）のような昔のおごりやかなオランダの政治家の青年時代をおもわせる。しかも（今後彼のうまれながらの力を十分發揮することを保証するものとして、単なる金銭上の価値よりもいっそう重大な）彼の最初の成功の影響を、私はほころびそめた花のように、彼のうえにたどることができ。そして彼はおりおり快活に浮かれることがある。このような快活さはたしかにあらゆる真の芸術家にとつて——たとえどのように勤勉な芸術家であらうとも——ときどき気分をかえるために必要である。

一七〇五年七月

これらすべてのもの——彼の容貌やたちいふるまい——の魅力は私の幼い弟のジャン・バプティスト（一六九五年に生まれて一七三六年に死んだ蘭画家で、この画家とペイタとの間には血統上の關係があると信じてをさへ動かし。彼はアントニーに心をひかれ、ほとんどうるさいほど彼につきまとい、父が家業をつぐように訓練したいと望んでいるにもかかわらず、どうしても画家になるのだという。それは子供のためになるであらう。私はおりおり彼の小さい顔と手が眠りのなかで動くのをみまもりながら、彼のと同じもつた小さい魂に、ある寛大な同情あるいは情操の拡大が必要であると思つたことがある。わずかに十歳の子供でありながら、ただたくわえて持つことばかり考え、わずかなたくわえを積むことばかり思っている。しかも彼は他の点では私欲をもたず、あたにかい心をもつて私たちみんなを愛

する。今のところ彼が小さい客舎家のようにたいていせつにするのは、アントニーといっしょにいる時間である。たぶんそれは私がときどき彼のためにおそれたあるいやしい性格の発達から彼を救うであらう。

一七〇五年八月

私たち——アントニー・ワットー、私の父と妹たち、幼いジャン・パブティスト、そして私は私たちといっしょにくらすアントニーの最後の日を記念するために、サン・タマン(ラッパシニヌの北西八マイル)に遠足をして、夏の夕方おそくなつて家にかえつた。大寺院とそれに付属したちならでんだ礼拝堂をたずね、大理石と真鍮細工のりつばなをとおしてなかなかに見られる高価な宝物、彫刻した厨子や黄金の聖骨箱や色ガラスのなかにおさめられた死者の紋章などを見まわつてから、私たちは森のなかの小さい宿屋で夕食をとつた。新しいはやりの、裾のながい上衣をしくよくつけて、実際よりも背がたかくみえたアントニーは、私たちにクリームと野いちごを戸外にもちださせた。私たちは(彼がたずさえている大きな手帳にいそいで写生をするために)彼の考えにしたがつて、樹がすこしうちひらいている森のなかのさわやかな空地の、やわらかな坂のうえにならび、ジャン・パブティストと末の妹は、私たちを見つけた旅まわりの琵琶師の調子にあわせて、草のうでミニュエットを踊つた。彼はパリにかえることを考えて、明らかにうれしそうである。そして

彼がこの教会堂にあるベテル・パウ・ルーベンス(一五七七年に生まれて一六四〇年亡)の絵について死んだ有名なフランダーズの画家)の絵について私たちに語つたとき、彼はしばらくのあいだ、私がかつてみたこともないほど自由に活気づいた。彼の言葉は、彼がそれらの絵について語るとき、ある動く光をふくんだ一種の美しい夕焼けにみちているようにおもわれた。しかも私はこれらのルーベンスの絵のいづれよりも、私のうちの礼拝堂にほとんど人目につかぬようにかかつている、古いオランダの画家ベテル・ポルブス(一五一〇年ごろ生まれて一五八四)の絵のほうがはるかに好きである。その絵では淳朴な守護聖徒がしっかりと両側に立つて、二人の素朴な老人を中央の玉座にすわつた聖母マリアにひきあわせている。マリアの顔と態度は、彼女のまわりのほのかな花の飾環のすきまにおかれたおぐらい小さな円形の絵に描かれた「光榮の図」のうちにあつて、大慈悲のありがたいみころのほどもをあらわしている。彼女のほの暗い青の外衣は大ベテル・パウルの描いたメデイチ家(イタリアの名家でフロレンス)の貴婦人たちの熱い肉色よりもはるかに私の眼をよろこばせる。それらの貴婦人たちのこぼつた宮廷の衣裳の下には、動作の豊かさや高貴の者らしいいならかさがあつて、それがアントニー・ワットーを驚嘆させたけれども。

私は早い朝のミサからかえつたばかりのところである。私は式がすんでから長いあいだ居残

一七〇五年八月

り、小鳥が教会堂のなかにまいこみながら、ふたたび出口を見いだすことのできないのを、どうしたら救ふことができるかと考えて、見まもつていた。私はそれがアーチ型をした屋根のしたをはるかに高く、もの狂おしげにかけめぐりながら、ついにそこから出ることができないで、力つきて死ぬのではないかと思う。私はある作家(英國歴史の著者)が人の一生をわずかにただ一度、冬の夜、明るく灯のともった広間をよこぎつて窓から窓へすぎさる一羽の鳥にたとえたのを、聞いたようにおもふ。ふとした一時の不運にとらわれて、あの大きな石造の教会堂の隙間のない円天井のなかを、息のたえるまで空しくかけめぐる鳥——人の一生もまたその鳥に似ているのであらう。

アントニー・ワットーは昨日パリにかえつた。まったく、たしかに成功の高みが彼のまえばによこたわり、私たちが想像のなかで彼のあとをたどり、彼がそこでどのように生活するであろうかと心に描くのさえ、しだいに困難になるような場所への道が、彼のまえにひらかれているようにおもわれる。

一七〇九年一月

アントニー・ワットーはフランスの芸術家を鼓舞するためにルイ十四世によつてローマに創立された大きな設立物を利用したいと望んで、ローマ賞(Prix de Rome)と呼ばれるものを得るための競技に参加した。彼はわずかに第二位を得たのにすぎないけれども、イタリーへの旅

をしようにする望みは捨てない。私はなんとか、やりくりして、それに必要な経費をたくわえることができないものだろうか。もしそれができたら、彼の氣をわるくしないような間接な方法で、彼に渡したいものだ。

一七二二年二月

私たちは今日のガゼット紙で、他の大きな世界の出来事にまじって、アントニー・ワットーが「優麗な祭の画家」(Peintre des Fêtes Galantes)と、いう新しい称号で美術院の会員にあげられ、また宮廷画家 (Peintre du Roi) に任ぜられたという記事をよんで、みな非常によろこんだ。弟のジャン・バプティストはその報道を知らせるために、老ジャン・フィリップとミシニール・ワットーのところに走って行った。

絵画の新材！ひとびとの部屋の古い家具は、この絵と調和するために、まったく一変されなければならぬようにおもわれる。あるいはむしろこの絵は、もっぱら一つの特殊な種類の部屋に適するように、企てられたものである。私たちにはよくわからないけれども、もつともすぐれた芸術に親しむもつともよい機会にめぐまれてきたパリーの鑑識家たちから非常に賞讃される絵画の新しい様式——これが若いワットーのなしたげたものである。彼は描きおこせることができないほど多く絵の注文を受けるらしい。彼——あんなにも優雅で、あんなにも生活の色彩に戯れている彼——はたしかに芸術の富裕な愛好者たち、ド・クロザイ氏や、ド・ジュリエ

ンス氏や、ド・ラ・ロク僧院長や、ド・ケリュス伯や、有名な画商ゼルサン氏等との自由な交りを楽しむであらう。これらのひとびとは彼をりっぱな本邸に泊らせ、また田舎の屋敷の伴侶にすることを切に望んでいる。パリーは今これまでになくゆたかで贅沢だそうである。そして上流の婦人たちは、扇に彼の絵をかくておもうとして、たがいにせりあうというのである。しかしそれらの大きな富はすみやかに持主が変わるようみえる。そしてアントニーの新材は？私はまったく見当がつかないし、その技巧と効果を想像することさえできない。ただ私はそこに軽やかさと媚びとの或るものを見わけることができるだけである。それらのものは私たちの古びたうすぐらいスペイン人のたてた家のなかのヘンリー四世やルイ十三世の時代の、いかめしい飾りつけにいつそうふさわしい、彼みずからの顔と心の奇妙なまじめさ、否、ものがなしさと相反するようにおもわれる。

一七一三年三月

私たちはみな非常に幸福であった——ジャン・バプティストはあたかもよろこばしい夢のなかにいるようであった。アントニー・ワットーはこの少年の画家としての訓練について相談をうけ、きわめて寛大に彼を自分の弟子としてひきとるように申した。父はなぜか最初ためらっているようであった。しかしアントニーにたいする心酔によって明らかにすべての性質が洗練され美化されてゆくジャン・バプティスト

は、ついに必要な許しを得、明日このなつかしい弟は私たちのところから去るであらう。初めての別れにたいする私たちと彼の悲しみは、ちょうど私たちが寝につくための挨拶をしようとしていた最後の瞬間に、思いがけず襲ってきて、彼の幸運にたいする私たちのよろこびを曇らせた。しばしのあいだ、私たちの楽しい会話の下には、あたかもそこに居合わせたすべての人がつとめてなにごとかを隠しているかのように、あるおちつきなきがひそんでいるようだった。そしてついにおさえきれなくなったのがジャン・バプティスト自身であった。それから私たちはなおも離れないで、ふたたび坐り、ほとんど朝まで心のたけを語りあった。妹たちは激しく泣いたが、私は自分の心をおさえることを知っている。数日のうちに楽しい生活が彼のために新しく始まっているだろう。そして私はたびたび手紙をだすように彼に約束させた。これからさきヴァランシエンヌにおける私の生活は、事實上、私の全生活のうちのかに小さな部分になることであらう。

一七一四年一月

ジャン・フィリップ・ワットーは今日彼の息子から手紙をうけとった。今もなおやめないのでピロウ・レースを(実際ななば手さぐりによってではあるが)編みつつづけているとはいえ、視力の衰えつつある老ミシニール・ワットーは、私が声をだしてその手紙をくりかえし読むのをきいてよろこんだ。それは彼の最近の成功をい

あまり好んではないらしい。

一七一四年三月

私たち——ジャン・フィリップ、ミシニール・

述べている。しかも彼は現在富裕な洗練されたひとびとのあいだでよくついでに生活の優雅な享樂と、故里の家における両親たちのなんの趣味もない生活とのあいだの対照によって、あまりひどく彼等をおどかさないうちに、これらの老人たちへの手紙のなかで、彼の大きな幸運と外部にあらわれた幸福とをわざと低く見つものであらうか。否、刺激のつよい、さしせまった、不満足な生活！それがこの手紙のいかにも魅力ある表面の下に實際あらわれているものである。彼の天分がのびるにしたがつて、かつて私たちがなおなすべき多くのものをもちた有望な青年につきものの特有な性癖にすぎないと思像していた彼のいやしがたい焦燥も大きくなった。そして彼が今やこのすべての成功から実現しえた唯一の楽しみは、この成功によってかちえた独立の思いであり、それがために彼が好むままに一つの住まいから他の住まいにのがれることができるということであるらしい。あんなにもよろこんで彼を迎え、またそのもの惜しみせぬ暮しぶりを彼がいつも非常に好んでいた立派な家々を、いくらか気ままに、彼はすでにいくたびか見捨てた。彼は實際彼の偉大な成功と、彼のまえによこたわっている報酬を把握することに失敗したのであらうか。いずれにしても彼は、結局、彼が今はいの特権をもっている優雅な世界をあまり価値あるものとは考えず、また彼みずからの作品——私自身としてはそんなににも見たいと望んでいる絵画——をたしかに

いつもの癖である、どこか離れた、ものに心をうばわれているような態度を捨てていない。もつとも彼は誰にたいしてもそういう態度をするのである。それは成功からくる慢心のためである、とあるひとびとはいうかも知れない。しかしそれはまちがっている。彼は昔からいつもこのようであつた。それはむしろ、あのすべての成功にもかかわらず、生とその日々の型にはまつたひとづきあいが、彼にとつていくらか重荷であるかのようにみえる。

一七一四年四月

ついに私たちはあんなにもバリーの洗練されたひとびとからもてはやされている彼の新しい絵の様式——ワットー・スタイルのあるものを理解するであらう。彼は親切にも私たちのおもな客間——家の二階にある三つの長い窓をもつた部屋——を絵画で裝飾しようと思ひつた。

私たちはいつもその部屋を古いヴァランシエヌ様式の記念碑であると考え、スペイン人があとに残した、いちじるしく黒または濃褐色と白との対照をおもんずる地味な様式の、おかすべからざる里程碑であり、陸標であると考えていた。疑いもなくスペイン人の眼は、彼等が自分の国の照りつける太陽の光からとじこもつたとき、その蔭を涼しく心地よいものに思つたのであらう。しかし蔭ではなく太陽をたいせつにしなければならぬ私たちの国にあっては、その莊重な様式はいくらか人の心におもくるしい感じをあたえる。かくて私たちが古風な模様の

あるアラス織のきれを使つてできるだけ手際よくおおうのがつねであつたあらい漆喰は、模様の円柱をもつた木の優雅な鏡板と、淡いバラ色の材料でできたくぼんだ場所とある楕円形の隙間の周囲のまったく軽やかな雲形模様でおきかえられた。その隙間は全部で四つあつて、うち二つは窓に面した大きな寝椅子の両側に開いた扉のうえにあり、一つは炉棚のうえに、いまひとつはそれとむかいあわせになつてゐる食器棚のうえにある。これらの場所はやがて彼の手になる四季の「幻想画」によつてみたされるはずである。彼はバリーから私たちに彼の工夫した新しい型のひじかけ椅子に適當なおおいをしたものと、絵のかいてあるクラウサン楽器を送つてくれるであらう。もとからあつた古い銀の燭台は、炉棚のうえで似つかわしくみえる。色のうすい奇妙な花が媚びるようにここかしこの小さなあきまをうずめ、あたかもひさしいまえにおとずれたひとから残された花束の霊が、その古い持主の死をいたんで、かく色あせたようにみえる。これらすべてのよそおひはその型の新奇なものにもかかわらず、實際新しいものというよりは、むしろすぎさつた時代のいつそうからやかな装飾のなごりのようである。ただ、しかし、壁そのものすら叫ぶようにみえる。否、私たちがかつてこの世で知つた、あるいは今後見いだしそうにおもわれるいかなるものよりも軽快な音楽と会話を始めようと、やさしく誘うようにみえる。ワットー自身のことを言えば、彼はたくみに、しかしきわめて口数すくなに話す。

彼は自分の新しいスタイルは、実は古い時代のもの、ここヴァランシエンスにおける彼みずからの古い時代のものである、と私たちに断言する。そのころ彼は石工の子として、ながい時間はたらしながら、自分がやとわれているここかしこの家の壁を、想像のなかで、このあやしくも美しい飾りつけをもつてよそおひかえた。その飾りつけはなんとなくそれみずから一曲の「室内楽」のようで、部分と部分がたがいにかかわつてゐる。そしてあまり鋭い調子は、白とほのかな赤と小さい金の筆触との微妙な調和のなかに入りこむことを許されない。しかしこれらすべてのものがまた非常におちついて居心地がよい、ということも認めなければならぬ。褐色のかわらの大きな古い暖炉のかわりに、火を入れるための優美な、あいた場所がつくられた。祖父の古びた重い家具は、やつとの思ひで屋根部屋にあげられたが、それはいたく父の好みにそむいた仕方であつた。そこでその変化を父に納得させるために、アントニーはいつになく強く光と蔭とを集中して、大きなかつらをつけた彼の肖像を描いてゐる。

一七一四年六月

彼はあの楕円形の絵——四季の図を完成した。おお、夏の幻想画のいかにもその季節らしい優美、自由とやわらかさよ——それは私たちが今日たずねていったような草の野であるが、はてしなくつづいていて、熱い日の照る白いはるかな遠方には、平らかなイタリーの建物が出で

れ、彼の作品のひとつの魅力である驚くべきかるやかさをもつて樹から樹にかけつらねられた花環や、あやしくも美しい草かきのたぐいが描かれてゐる。私はこの絵をとおして、彼のよろこぶものがなんであるか、彼がこの私たちの生活をおくるひろい世界から特になにを好んで選ぶかというのを、やつと理解することができた。私は彼が私たちのために飾りなおしてくれた部屋の清らかさ——一種の精神的な清らかさ——しかも、あくまでも、ものの形と色とにあられた精神的な清らかさに心をうたれる。彼がまもなくかえつてゆくバリーの実際の生活は、この種のものをそんなんにも強く好むほど、この絵におとらず清らかなのであらうか。ただ彼の作品と彼自身のそんなにも大きな部分を、実用品に結びつけるのは惜しいことにおもわれる。これらのものは使いふるされることによって死に、もしくは私たち自身の古い家具のように単なる流行の変化とともに消えさらねばならないからである。

一七一四年七月

アントニー・ワットーの訪問の最後の日に、私たちはカンブレ（北フランスの町で有）に集りを催した。私たちは大寺院の会堂にはいった。ちょうど晩禱の時間で、たまたま「テレマク」の著者カンブレ公（一六五一年に生まれて一七一五年に死）が内陣のなかのさだめの席についていた。彼は非常に老齡のようにみえて、まれにしか勤行に出ない。彼はバリーではまったく見られないの

で、アントニーは非常に彼を見たいと望んでいた。たしかに彼を見、彼が弱々しいけれどもかぎりなく美しい声をもって、なんとも言いようのないほどみやびやかに手を動かしながら、司教としての祝福をあたえるのを聞くだけでも、ここまで来たかいはあつた。彼こそはまことの *grand seigneur* (大公) というべきであらう。

彼の老いらくの洗練、天才と榮譽のしるし、いな失意のあとすらも、自然の優美といつしよになつて、彼をこの世にたいしてあまりにすぐれてかけはなれた(私はこれ以上適当な言葉を知らない)ものに見えさせる。 *Omnia vanitas* (すべてむなし)——彼はそう言っているようにおもわれる。しかし彼はそれを深いあきらめをもつていう。それが私たちの多くの者が執着しているものを、まったくとるにたならぬものに見えさせる。 *Omnia vanitas*、それがこの場合においては、人生からあたえられるすべてのものを自己のものにしようと思えばできたひとが言っているのであるから、実際私たちの生活にたいする適当な解釈ではなからうか。しかも彼はけつして宮廷には姿をみせず、ここでもほとんど配所のさすらい人としてくらしてきた。ルイ大王ともいわれる人が、カンブレ公をそばにおくのたえなかつたのは、このまことの *grand seigneur* (大公) あるいは *grand monarque* (大君) の生まれながらの才能と天の恵みをねたんだのであらうか。

私自身の肖像は、彼の突然の出發のために、未完成のままで残された。私はその絵のために、彼の指図でつくられた外出衣をきて、モデルになつた。それは特殊な絹地の長上衣で、ゆたかな小さいひだとなつて落ち、彼の好きな、しかしほんとうの私自身からはまったくかけはなれた「一味のきびきびしさ」を私にあたえた。私がこれからいつも着ける古いフランダースの荒絹の外衣のほうが、私にはよりよく似あう。

私は私たちの親切な、しかしときどき氣むずかしくなる友が、私たちが弟のジャン・パプティストについて聞きたがつていふことを知りながらも、彼についてあまり話さなかつたことに氣がついている。彼は單にジャン・パプティストの不断の勤勉についてのみ語つた——用心ぶかく、どこか不満らしいようすをもつて、あたかもそのあまりの勤勉さが彼をなやましたかのように。

一七一四年九月

アントニーはあのひさしい計画であるイタリアへの旅を實行する日があるであらうか。もしも彼がそれを実行したならば、私は彼自身のためにそれをよろこぶであらう。しかもなおその旅は大きな山野をこえて、わびしくもはるかなものにおもわれる。私はその目的のために充分なだけの金額を彼に提供しようとする計画をたてたことをおもいだす。しかし彼はもはやそれを要しない。

私自身にとっては、どうして時をきりぬけた

らよいかということが、避けがたくもおりおり問題になる。そしてそのことが、かくもみじかい生涯のことをおもひあわせると、言いようのない悲しいこととして私の心をうつ。ながい陰鬱な雨のひと日は暮れて、今まさに湿氣をふくんだ突然のはなやかな夕焼けにかわろうとし、落日は一瞬間、今宵の晴れることをおもひわせながら、しずかな世界のはるかな地平線から、野をこえ柳の森をこえて、お告げの鐘のひびく広場の塔の動きやすい風見と、ながく尖つたゴシック窓を照らす。私はサン・ヴァーリストの晩禱が好きである。そこへゆく道は遠い。そして私はいつかまたそこでアントニー・ワットーにあらうかも知れないというとりとめもない空想をいつもいだいている——ちやうど子供のとき、ある日、銀貨の形をした小さい箱をみいだしてから、その後ながいあいだ手にいるすべての貨幣を、それが聞くものとおもつて、ためしみるのがつねであつたように。

一七一四年九月

このむしあつた夕方、涼をとるために私たちは「ワットーの部屋」に坐つていた。突然一陣の風が壁にとりつけられた燭台の灯をゆるがした。午後のあいだじゅうつづいてきた遠雷の音がついに爆発した。そしてはげしい雨のなかに、広場をよこぎつてびびいた乗合馬車が、私たちの家の戸のまえにとまつた。一瞬のうちにジャン・パプティストがふたたび私たちといつしよになつた。しかし彼の眼にはにがしい涙があつた。

一七一四年七月

——破門されたのである。

一七一四年十月

ジャン・バプティスト！彼もまたアントニーからしりぞけられたのである。それは私たちの友情と同胞としての同情をいっそう親密にする。そしてなお彼があつた「ワットーの部屋」で、以前にもおとらず勤勉に、そしてなお彼の前の師にたいして忠実な心を失うことなく仕事をすると、私はジャン・バプティストがあえてなお言おうとしないアントニー自身を見、彼の作品に非常にちかづき、彼の偉大な才能を理解することができるよう気がする。かくてジャン・バプティストの作品はアントニーのそれに近い点において、これからさき私の生活の中心の興味になるであらう。私はそのなかに私みずからを埋める。

一七一五年二月

もしも私にこれらのことがらがすこしでもわかるとすれば、アントニー・ワットーがパリーのあの洗練された生活をかくもすぐれて、かくも多くの生氣をもつて描くのは、ひとつには、結局、彼がそれを見さげあるいはさげすむからである。かく考えてわれとわが心を説きふせることは、彼の好み——私の世界とそんなに異なつた世界にたいする好みとおもわれるものにはない私の女らしい満足である。あの嬌態とは、それらのものの親しい理解によつてのみ、あの

ように完全にえがくことができる。彼にとつてそれらのものを理解することは、とりもなおさずそれらのものを侮蔑することである。しかも（私にはなぜだかわかるような気がする）彼はそれにもかかわらず、それらのものに魅惑される。彼の名声がたかくなるにつれて、彼みずからにたいする不満がつよくなるのも、それがためである。彼がこの町に名も知れずとどまつていたならば、それは彼にとつてよりよかつたであらう、彼はより清らかな真実の幸福を享受したであらう——それが私みずからにとつてもよりしあわせであつたように。

ジャン・バプティストにあつてはまったくおもむきがことなる。彼は都の生活とそのすべての美しいむなしさに、それみずからと同じ高さの水準からちかづく。そしてちょうどアントニー・ワットーが輕侮のうちにやめたところから始めて、その生活と生活の方法との堅実な、まぎれもない模写をつくる。

一七一五年三月

彼の絵のなかには（私はこのことを彼自身のいつもひかえめな言葉をとおしてさとするのである）彼が彼の意図をワットーよりもいっそうすぐれて成就している点がある。彼はやつとおどろくほど自分というものをおさえて、ワットーのことについて口をひらくようになった。そして彼みずからの絵のひとつひとつのなかで、その他の点ではそんなに正しく真実に語りながら、ワットーならばどこそこをどんなにとり

あつたであらうとか、なんというすぐれた手法をもつてやすやすとよりよくそれを描き——不可能なことを成就したのであらうとかいって指摘する。

一七一六年二月

人の世には、ある人にあたえるためにつくられて他の者にはわりあてられていない——おそらく私にはわりあてられていない——よいもの、心をひくものがある、ちやうど、美しい着物でありながら誰にもあうとはかざらないように。私のうちには動きのにぶい性質があつて、それをうながしたり、それに干渉したりすることは、肉体上の苦痛に似ている。それだのにあの人、ワットーはあんなにも才気があつて、気みじかに、動きやすい。私はジャン・バプティストのそばにいて、彼のしずかな、むらのない仕事と生活にふれているほうが、はるかに気持がよい。最初のあいだ彼は彼の始めた仕事を気むすくしくしていた。しかし陰鬱な日がそれと知られぬ変化によつていつかほがらかに晴れわたるようになり、その無心の仕事がついに彼の心と気分をはれやかにした。夜のひきあけとともに彼は仕事部屋である「ワットーの部屋」にはいつて、ひねもすそこで仕事にいそしむ。くらい夕暮れには彼はクレヨンをもつて昼間に仕上げをすべき絵の準備をする。彼にとつて仕事は同時に娯楽である。彼は彼がその風習を描写しなければならぬ上流社会には、まれにしかはいらない。彼は自分の絵のなかの動物、寵愛する動物が単

なる玩具にすぎないことを知っている。しかし彼はあまたの作品、たとえば鴨居の装飾画やクラヴサン楽器の箱の絵などを完成する。彼は彼のもつともしあわせな、創作にもつとも適した時間を、ちょうど純金をたくわえるように、ある一つの絵、彼が真の傑作にしたいと望んでいる「ぶらんこ」の絵についてやす。彼は彼の特にすぎなある真珠のようなねずみ色の絹地を用いて、おどろくべき効果をだす秘密を知っている。そして私たちは彼がひとの手を——もちろん画家はそれを他のすべてのひととよりも、すくなくとも二倍よく理解すべきである——すぐれた表現をもって描くことを認めなければならぬ。

一七一六年三月

このような勤勉——あまりにも骨身をけずるような勤勉のため、気持がしずんでくるのであるうか。私にはわからない。ときどき（それは彼の唯一の憂鬱であるが）彼は貧しさにたいする理解、年とつた者の窮乏といやしい環境にたいする不思議な理解をあらわす。そしてそのことが私に、むかし彼が子供のころ、好んで貯蓄したことをおもいださせる。しかしそれはそれとして、彼は今のところ、いわば名の知れぬワットーではあるが、彼とアントニーとのあいだの大きな対照をかたちづくっているあの着実さが、ときおり、いわば積みかさなり、変化して、天才のきらめき、優美さと、なんともいいようのない一味の真実さとなり、その瞬間、彼はす

べての重くるしさからしばしのあいだ脱却して、彼がみずからひかえめに私にいうように、彼の師匠を凌駕する。しかも彼が彼自身とアントニー・ワットーとのあいだの相異をもつとも強く感じるのには、まさにそういう瞬間である。「あのひとの国では小石までがみな金塊ですからね」と彼はまったくなんの悪意もなしに言う。

一七一六年六月

アントニー・ワットーが今ちょうど宿にしているところはほんとうに気持のよい住居である。それはド・クロザー氏の *Hôtel*（本邸）で、単に居心地のよい住居であるばかりでなく、またしあわせなひとびとが遠くから見にゆく貴重な博物館でもある。ジャン・バプティストもまたそこを見たことがあるので、私にその場所の説明をしてくれる。骨董品やあらゆる種類の美しくも珍しい品々、なかんずくアントニーがいたく尊敬する昔の大家の原画が、そこで見る者の周囲いちめんに陳列されていて、それらのものの影響や精神がしらすしらすのあいだにひとにはたらく、ひとの心にはいつて、ひとのたちいふるまいにまで影響する。その家はリシュリュー街のそばにあるけれども、まわりに広い庭をもっている。ド・クロザー氏はそこで音楽会をひらく。そしてアントニー・ワットーはそのひとつの部屋の壁に、私たちのところにある絵にならって、しかし疑いもなく再考によって改善された「四季」の図を描いた。この美しい場所はいましばらくのあいだアントニーの住居であ

る。その家は平家建てで、田舎の農家のように、*厩斜屋*の屋根部屋がついている。私の想像によれば、アントニーはうるさい訪問者たちからしばしのあいだそこのがれて、バリーのさなかにありながら、露ふかい園のさわやかな空気を吸っているのである。私自身のことをいえば、私はこの夏の午後、ジャン・バプティストがいかに満足して仕事をしている美しい「ワットーの部屋」で、息づまるようなおもいをして

一七一七年五月

いろいろなゆきがかかりがあったにもかかわらず、ジャン・バプティストは、かつてアントニー・ワットーが企てたヴァランシエヌへの訪問をまちのぞんでいた。彼はつねにアントニーの以前の愛顧が復活されることをのぞみ、それにたいして根気づよい希望を失わない。そしていまアントニーは私たちのなかにあって実働仕事をしている——いらいらしてひとに気をもませ、やつれて、なにかの神経病をもった婦人のように。してみれば、ひとがはなやかな才能をもった者にたいして感じなければならぬのはあわれみの情であり、ただそれだけなのであるうか。彼はさきほどまでジャン・バプティストの作品を批評していた。弟は彼の批判を気前よく感謝してうけいれる。結局、ワットーは彼みずからの芸術をかるんじ、その真の愛好者でなく、彼の芸術にたいする他人の心酔、たとえばジャン・バプティストの熱狂によって、かえつ